

図書館報

光血

No.159



港町回想

若葉旅館専務取締役

矢野 慶 汰

僕が酒田へ来てもう六年になる。

当時は丸山明宏名義」をふと思い出した。

江戸時代の北前船交易でその栄華を極めた酒田は、中世のヨーロッパのハンザ同盟都市よろしく、今なお町人たちの自治都市的かつ自由な気質が残されており、僕がかつて抱いていた東北のイメージとは、驚くほど乖離している。町人たちは世話好き、新し物好きで飽きっぽく(笑)、そして人が良い。こんな気っ風から感じる風通しの良さは、かつて自分が世界を旅していた頃の、例えば大航海時代に栄華を極めたイベリア半島のスペイン、ポルトガルの港町に住む人々の温かさと同重なり、時折思い出す。

「竹久夢二の長崎十二景の絵さながらに、港あり、丘あり、山あり、川ありで：(中略)：古い町なりに因襲的なくせに、半面、お祭り好きで開放的で、情の深い人懐っこい町：冒頭のこの描写は、つくづく港町酒田みたいだなあ、と思う(竹久夢二のコレクションだつて相馬楼にあるではないか!)。

を貪り読んだ(単なる現実逃避か)。世界最終戦争論から、サザエさんのマンガ本、そして交通公社の時刻表まで、あらゆる日本語の本が日本語、日本語、日本文化メジャー(専攻)の研究書物として所蔵されており、それは彼の地では僕にとつてのオアシスでもあり、数少ない娯楽だった。何度も読み返したこの本は帰国後、神田の古本屋で初版に出逢い、まるで旧友に再会したかのような快哉を叫び、愛読書の仲間入りを果たした。

終戦記念日が近づいている。紫の履歴書では十歳で被爆した美輪氏の「マグネシウムを炊いたような」長崎の原爆の白い光の描写にはじまり、「交響曲第二番」地獄」と表現した阿鼻叫喚の火の海と化した大地を逃げ惑う絶望が描写され、読むたびに胸を激しく突く。また、大陸から引き上げ、今でいうPTSD(心的外傷後ストレス障害)を患う復員兵をからかう子供ゆえの無知を、後に、胸がうずく後味の悪さとして描写する美輪氏の筆致は七十六年前の凄惨さを今日に色褪せずに伝えて

僕がこの本に出会ったのは今から二十年以上前のこと。毎日文字通り勉強漬けで、ついてゆくのに必死だった留学先の米国、アリゾナ大学のアジア研究図書館の日本語書架だった。

僕が暮らす若葉旅館の隣には、「希望ホール」があり、もちろん岸氏の代表作に由来しているのだが、美輪氏も岸氏もその歌声が人々心を捉えて離さないのは、港町出身と云う共通項がある

地域史料の保存について④

酒田町行政史料について

—酒田三町大庄屋文書を中心に—

庄内酒田古文書館館長 杉原丈夫

江戸時代は一国一城制が基本でありました。しかし、酒井家入部の折に鶴ヶ岡城が居城となり、酒田には亀ヶ崎城を置き、酒田及び旧飽海地区を守護する亀ヶ崎城に城代を置き統治することになりました。

また、藩では禄高二〇〇石程の酒田町奉行を派遣し、町行政を執行する責任者とし、町には町年寄及び三町大庄屋(補佐は長人)がおり町政を行っていました。

また、大目付配下御徒目付を酒田に在番として配置して配下の足軽目付が、さらに町奉行配下町同心と共に酒田の治安を守り、自治的行政を展開しておりました。三十六人役(衆)の面々については、行司と違って三人ずつ御用を務めました。また、それぞれの町には肝煎を置き、長人が肝煎を補佐しておりました。

亀ヶ崎城代は、初代は天和八年(一六二二)松平甚三郎

で、歴代二十三名の城代が入れ替わりました。後に城代不在が多く、その時は六人の組頭が在番と称して一か月交替で城代の代りを務めました。

光丘文庫には松平武右衛門叢書が存在し、「竹御城代控」が五冊あります。



竹御城代控 五冊之内一 ※竹は竹内五兵衛のこと

次に町行政のトップは町奉行で、酒田町奉行の初代は寛永九年(一六三二)水野市兵衛で三十八人が交替しておりました。

酒田三町町年寄(鑑屋、加賀屋、上林の三人)及び町大庄屋(酒田町組:栗林新右衛門・渡辺隼人、内町組:伊東弥十郎・齋藤半兵衛、米屋町組野附七郎兵衛・池田吉兵衛

の六人)併せて九人おり、酒田の町行政はこの九人衆が町役人として、町民の地代金の徴収や戸籍の管理、町の治安など現在の市行政の内容を担当しました。

各町大庄屋を補佐する長人(おとな)がいました。

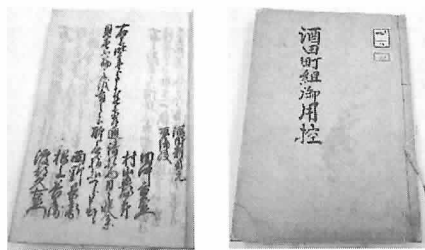
また各町には肝煎がおり、長人がそれを補佐しており、その下に五人組を編成している町民がおりました。

酒田町奉行の下、酒田の行政は町年寄、町大庄屋が担当しましたが、どのように運営し、治安の維持をしていたのかを知る上で、酒田町組大庄屋の御用留等が重要な史料となります。

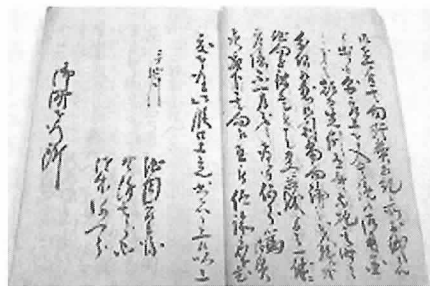
内町組大庄屋伊東家の場合は

- 一、御用留など:五十四点
- 二、水帳(検地帳):五十一點
- 三、絵図面など:五十点
- 四、戸口・人別改など:四十點

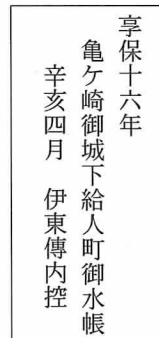
米屋町組については、野附家文書が御用留を中心に一二冊、及び酒田町組の御用留をも所有しています。これは、幕末において野附家が米屋町組と酒田町組を兼務しているので貴重です。



野附家文書「酒田町組御用控」は三町の内唯一の御用控



御用書抜書



伊東家文書



給人町絵図

(右半分略)
度奉存候、此段口上覚書ヲ以申上候以上
午四月 池田 吉兵衛
野附七郎兵衛
佐竹 弥一郎
御町奉行所

以上、江戸時代の酒田の町行政を把握できる史料については光丘文庫に豊富にそろえてあり、中でも伊東家六五〇〇点余り、野附家文書の一二点については酒田町奉行・町年寄・町大庄屋の動向が分かる貴重な史料となっています。今後、史料保存と同時に十分その活用が図られていかなければならないと考えます。

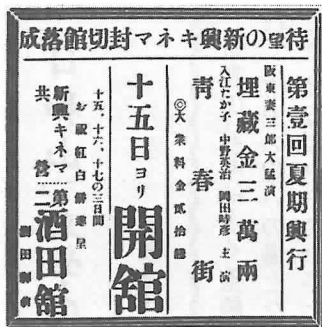
戦前の酒田における映画館(5)

酒田市立図書館長 岩 浪 勝 彦

○第二酒田館(新興旭館)

大工町にあった洋品店、日の出商店の経営者であった高山菊次郎が天王下(駅前)にあった片倉製糸倉庫を利用して経営していた「日の出座」を改築して、松竹と関係の深かった新興キネマ作品の専門館として昭和九年(一九三四)六月十五日に開業したのが「第二酒田館」である。酒田の映画館としては中央座開館以来十二年ぶりの新館であり、上通りに初めて映画館ができた例であった。

経営は高山と酒田館主の佐藤吉兵衛の提携により、改築費用は佐藤吉兵衛が負担したものであったが、いつ頃まで



第二酒田館開館時の広告(昭和9年)

この館が存在していたのかは現存する資料では判然としない。昭和十年一月下旬の新聞には経営者が変わった「駅前新興旭館」という表記が用いられており、昭和十年初頭に経営者とともに名称も変更されたと推測されるが、明確な時期は判明していない。新聞で確認される広告では昭和十年三月二十六日のものが最新のものである。昭和十年にはそれまで新興旭館で上映されてきた新興キネマ作品が酒田館で上映されているほか、昭和十一年元旦には例年掲載される挨拶広告が見当たらないことから、昭和十年中には閉館したものと考えられ、営業期間はずか一年足らずであった。

○港座

港座は歌舞伎や演芸などを上演する劇場として明治二十年(一八八七)に開業し

たもので、本慶寺前の米山座が明治二十七年十月の地震で倒壊してからは、千人以上を収容できる酒田で唯一の劇場として、歌舞伎、文楽、浪曲のほか、新劇の松井須磨子(大正五年)、初代江戸屋猫八(昭和二年)、ミュージカルの日本少女歌劇座(昭和四年)、喜劇の新宿ムーランルージュ(昭和十一年)、漫才の砂川捨丸(昭和十一年)、東京少女歌劇(昭和十五年)などのほか、変わったものではボクシング対柔道(大正十四年)など、様々な興行が行われている。

その長い歴史の中で大正六年(一九一七)四月に天然色活動写真株式会社(天活)の直営常設館となったことがある。その際は酒田で唯一の劇場が活動写真常設館となることにより、芝居や義太夫の上演場所がなくなることを憂えるとの記事が大正六年三月二十八日の酒田新聞に掲載されている。しかし、当時の新聞に掲載された広告から推測すると常設館だった期間は約二年弱であり、常設館をやめた理由につ

いてはこの時期の新聞が現存しないため不明である。昭和六年には競売にふされ、その後には舞台での実演を中心とする劇場に戻り、昭和十年代まで時折、映画の上映も行っていた。映画常設館となることについては、当局に申請を行っていたもののなかなか許可が下りず、市の人口が四万人を超えていることが許可の目安となっていたらしく、太平洋戦争開始直前の昭和十六年九月に東宝直営の映画専門館となり、戦中も映画館経営を続けた。

戦後は主に松竹と東宝の作品を上映していたが、昭和二十九年二月三日の夜間に火災を起こし、明治二十七年の地震でも倒れなかった建物を六十七年目にして失った。しかし、同年五月には再建し、黒澤明の「七人の侍」により営業を再開している。シネマコンプレックスの先駆けとして、大規模な改築を行い、昭和五十一年十二月には大・小、昭和五十三年七月には大・中・小と三つのスクリーンを設置し、グリーンハウスがなくなっただけからは洋

画も上映したが、平成十四年(二〇〇二)に営業を停止し、六十年を超える映画館としての歴史を閉じた。

なお、第一五五号で酒田における映画公開に係る最古の記録を「明治四十二年五月」と書いたが、「酒田新聞」の記事から、明治四十一年十一月に京都の映画会社である横田商会が港座で「前代未聞浮かれ閻魔」「悲劇残月」等の作品を上映していることが判明したほか、この記事中に「先年北清事変の活動写真会を当港に挙行し大喝采を博したる横田商会」とあり、義和団事件を扱った作品を公開したことがわかり、これ以前にも酒田で映画の興行が行われていたことがわかる。

港座は焼けた!!
漏電か？暖房過熱か？
 原因は目下調査中
 損害は数百万円に上る見込み

港座焼失を報じる新聞記事(昭和29年)

日和山「文学の散歩道」の案内

日本現代詩人会会員 相 蘇 清太郎

日和山公園はよく整備されて、市民の憩いの場となっている。若者や子供の姿を見ると一日がうれしい気分になる。港、最上川、日本海、山並み、市街の展開のようなど一望できる。散策やウォーキングの場でもあるだけでなく、来客があれば必ず案内することになる。

公園一带に「文学の散歩道」が整備されている。酒田にゆかりの俳人、歌人、作家、画家、思想家、学者、詩人などの作品を碑文にした文学碑が二九基もある。酒田市制五十周年(一九八三年)事業で、それまであった石碑に新たに建てた碑を加え整備された。このような数多くの文学碑がまとまってあるのは全国でもめずらしいだろう。

情、地元酒田出身では数学者小倉金之助、哲学者伊藤吉之助の短歌、佐藤十弥の詩、秋沢猛の俳句などがある。酒田市観光ガイドブック「さかたさんぽ」(無料)に「文学の散歩道」マップと各碑の簡略な説明が掲載されていて便利である。

地域のウォーキングクラブで歩いた時には、観光ボランティアの方に碑文の解説をしてもらったのも記憶に新しい。この六月には、客人に芭蕉の「おくのほそ道」の酒田・庄内路を案内したが、文学の散歩道を見てもらった。一七世紀フランス詩の研究

文学碑の案内 来訪者に酒田を案内するのにも文学碑は格好の材料である。四年前(二〇一七年一〇月)、日本現代詩人会、山形県詩人会主催の「現代詩ゼミナール(東日本) in 酒田」(全国・県内から七〇名ほど参加)のとき、セミナー翌日のエクスカージョンで、地元詩人四人が同行して案内した。「こんな人が酒田に来ていたの、この地元の人は」との質問に、つい説明が長くなったが、予め依頼していた市立資料館の調査員Kさんの簡潔な全体の説明があった。

文学碑のうち松尾芭蕉の句碑は三基ある。「おくのほそ道」の旅の途次、酒田での句である。芭蕉の旅は一六八九(元禄二)年三月、江戸深川を発ち、大垣まで約一五〇日の歌枕をめぐる大行脚であった。奥州から出羽へ。本合海から舟で清川に上陸。出羽三山、鶴岡から赤川を下り、酒田には、六月十三日(陽暦七月二九日)に到着した。芭蕉の句の碑文の表記は、校訂本により異なるが、ここでは、尾形 伴・森川昭監修『おくのほそ道図譜』の表記を用いる。

- ①「暑き日を海に入れたり最上川」
- ②「あつみ山や吹浦かけて夕涼み」
- ③「初真桑四つにや断輪に切ん」

で、四人の句の懐紙(芭蕉自筆)が碑文になっている。玉志亭で、納涼の興に瓜をもてなして発句を芭蕉に乞うと、句を詠まないものは食べることができないと戯れて、芭蕉・曾良・不玉・玉志の四人で、即興の句を詠んだ。

歌仙の発句から俳句へ
芭蕉は、酒田は不玉亭で九泊した。芭蕉の発句は、いわゆる挨拶句である。その土地の風景・文化・歴史への挨拶(呼びかけ)、同時にその土地の人物(俳人)への挨拶(ありがたさの表明)としての発句。その発句から独立した「俳句」への文学的達成を追究した。芭蕉は、「おくのほそ道」(紀行文俳文)の完成に向けて幾度も推敲・改作を重ねた。「文学の散歩道」の芭蕉は、そのような芭蕉であったことも、ぜひ案内には入れたいと思う。



芭蕉句碑「温海山や吹浦かけてゆふ涼」

新史料「浜町小野九兵衛家文書」の紹介 ～酒田商人の暮らし実像～

酒田市立光丘文庫古典籍調査員 小野寺 雅昭

酒田浜町二七番地に江戸時代から染屋を営んだ小野九兵衛家があります。最近、同族の小野太右衛門家のご厚意で光丘文庫に寄贈された「小野九兵衛家文書」から、明治・大正期の酒田町人の暮らしを紹介してみます。

一 神宿の総務取締役の小野家 ※写真A



A 神宿の日誌と会計簿

一八七九年(明治十二)五月二十日日枝神社の神宿を染屋仲間組合として九兵衛家が勤めました(『酒田市史・史料篇七』八三一頁)。翌年か

ら戸長役場ごとの組合町が担当することになり、一九〇二年(明治三十五)に四か町(九兵衛家周辺では浜町・天正寺町・荒瀬町・米屋町)組合は浜町田中三郎右衛門宅の神宿を支えました。九兵衛家「神宿事蹟及費用調」(請求89)という日誌では、総務委員には九兵衛のほか、天正寺町遠田富之助・荒瀬町白畑治郎左衛門・米屋町佐藤九郎右衛門が、前年三月十六日より度々会合し、祭礼費用の徴収、飾り物や神棚・旗竿・炭・茶・するめ等の買い物の手配構想を始めています。九兵衛は市原平三郎とともに会計も兼務しています。

今から一〇年前の神宿づくりの実像をよく物語る酒田祭に関する貴重な日誌です。九兵衛は当年三月一日神宿田中に三〇円の謝礼を渡します。五月に入り人形(九兵衛は「於福」を飾る)胴

固めと衣装付けをします。各町委員は手弁当で飾りを組みます。東平田の北沢から運んだ長押桜花をセットします。十日に灯ろうを提げました。十三日からは消防夫も出張させ、供餅・神酒・洗米・昆布等を供え、高張提灯も張り替えます。いよいよ十九日は「神宿譲り」です。二十日当日獅子頭には米一升、山師・音頭取りに手ぬぐいを送ります。

二 廻船問屋尾関又兵衛・関西商人との取引 ※写真B

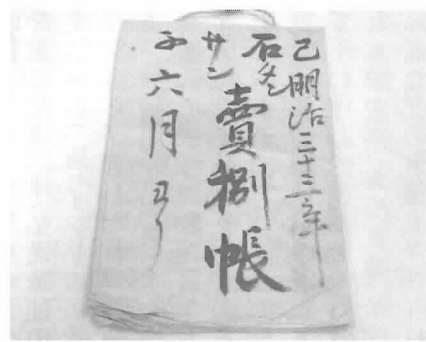


B 「売物通」

本町六丁目の明治天皇行在所(明治十四年酒田に行幸)の所に住んだ尾関(油屋)家は、染屋(小野屋)九兵衛に木綿を売っていました。九兵

衛家ではそれを染め上げ酒田の人々に販売しました。三冊明治初期の記録です。こうして関西木綿が染め上がり各地に広まりました。染物は日清・日露戦争が近づくにつれて海軍旗の注文にも応じます。また、写真Cのように九兵衛家は石炭酸を各役場に消毒用に販売しました。石炭酸は一八七九(明治十二)コレラ大流行で広がります。順天堂

の帳簿が在庫種類の豊かさを示しています。得た収益金は六十七銀行・安田銀行に当座で預け、宮内(酒田市)・松嶺・砂越・余目にあった小作地からの作徳米を地主として集めます。特に第一次世界大戦中の一九一六年(大正五)田村駒・伊藤萬(大阪)や丸紅京都支店、杉村・宮崎(東京日本橋)だけでなく、皆川(越後加茂)・川芳(浜松)などの商店と取引しています。写真D「差引帳」は十三冊毎年残され、経営の推移がよくわかる貴重な史料です。研究が進めば、地方商人の経営実態がよくわかる珍しい史料です。九兵衛家は大火に遭わず大切に残してきました。息子の貞吉を慶應義塾、娘のトヨを明治大学に通わせながら、時代の先端を行く経営を行った酒田人でありました。



C 石炭酸の売りさばき帳

関係の軍医総監松本良順も推奨しています(『東洋実業家評伝』一九三頁、国立国会図書館デジタルコレクション)。

経営史料も実に優れています。明治後半く大正期の、店卸



D 差引帳



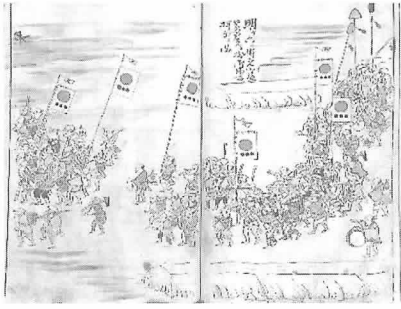
「光丘文庫デジタルアーカイブ」のコンテンツを追加します

光丘文庫が所蔵する資料について、市民のほか、広く全国に周知を図り、酒田の歴史について学び親しんでもらうため、平成三十年度から「光丘文庫デジタルアーカイブ事業」を実施し、インターネットで公開しています。

今年度は、県指定文化財や古地図画像の追加などについて、十月からの公開を予定しています。

（今年度の主な内容）

□県指定文化財「保定記」、御普請之部の追加



『続保定記』

□「酒田大震災写真図」や「大日本職業別明細図」等の古地図画像の追加

光丘文庫と中央図書館で廃刊となった地元新聞を閲覧できます

光丘文庫と中央図書館では、所蔵している明治期からの地元新聞を電子化し、館内のパソコンで閲覧することができます。今年度は、電子化されていなかった「荘内タイムス」の電子化を新たにを行いました。

「荘内タイムス」は大正十一年創刊の「両羽朝日新聞」を改題して昭和三十五年（一九六〇）一月十七日に創刊された二ページ立ての地元日刊紙で、光丘文庫では昭和三十七年（一九六二）四月三十日までの計七六八日分（計一、五五八ページ）を所蔵（計五十九日分は未所蔵）していますが、平成初期に実施した地元新聞のマイクロフィルム化から漏れていたことから、今回初めて電子化が実現したことに伴い、パソコン画面で紙面を閲覧することが可能になりました。

高度成長期の酒田を中心とした庄内地方に関する記事は、県内他紙では扱わない細かい出来事もカバーして

おり、六十年前の酒田の出来事を伝えてくれる貴重な資料といえます。ぜひ光丘文庫または中央図書館でご覧ください。



『荘内タイムス』

図書館企画展示のお知らせ

中央図書館では、新刊図書や郷土出版物の案内、常設企画展示、定期的にテーマを変えた企画展示を実施しています。

今回の企画展示は、酒田市美術館とコラボした酒田出身の漫画家の作品や、読書で楽しんでもらう旅の本の紹介などについて特集しています。手にとってお気に入りの本をご覧ください。

□酒田が生んだ漫画家 佐藤タカヒロ

□心も体もスッキリ！しようフルーツいっぱい

□図書館の本で巡る紙上の旅

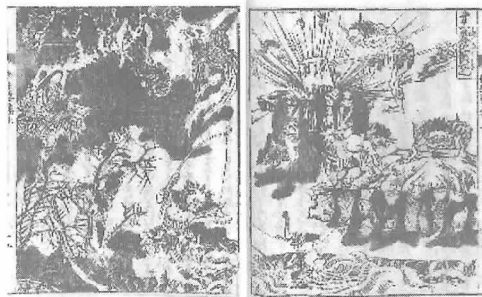
□いま振り返る国語の時間
【展示期間(予定)】
八月三日～九月三十日

○読書感想文を書こう

「第六十七回青少年読書感想文全国コンクール」の課題図書、「第五十四回YBC読書感想文」指定図書、「第五十四回夏休みの本(緑陰図書)」を展示しています。

光丘文庫展示のお知らせ
「仏教 神道古書展」

光丘文庫には経(仏の教えを記した書)、律(仏教教団の生活規則)、論(インドの仏教哲学者らが著した教義綱要書)、疎論(注釈書)を始め高僧伝や宗派別教義書など貴重な仏典が数多く所蔵されています。また、神道においては江戸期に国学者としてその中心的役割を果たした本居宣長、賀茂真淵、平田篤胤などの書籍も保存されています。



『往生要集地獄物語上』

今回は「般若心経和訓図会」、「往生要集」、「釈迦御一代記図会」、「玉だすき」、「延喜式」、「古史成文」、「神代俚談」など十典ほど展示しています。日本の宗教である仏教・神道の世界に触れてみて下さい。

【展示期間】
四月一日～九月二十四日
(土日・祝日を除く)

新型コロナウイルスの感染拡大防止にご協力ください

図書館では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、次のような対策を実施しています。

- ・手指消毒剤の設置
- ・椅子を減らし、間隔を開けた配置(インターネット閲覧用パソコンを含む)
- ・窓の解放による換気(随時)
- ・カウンターへの透明シート設置

【執筆者紹介】▽▽▽

- 矢野慶汰 (若葉旅館専務取締役)
- 杉原丈夫 (庄内酒田古文書館館長)
- 岩浪勝彦 (酒田市立図書館館長)
- 相蘇清太郎 (日本現代詩人会会員)
- 小野寺雅昭 (酒田市立光丘文庫古典籍調査員)

デザイン 佐藤十弥

発行

酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫

酒田市中心西町二番五九号
酒田市中町一丁目四番一〇号

電話(24)二九九六番
電話(22)〇五五一番

印刷 明徴出版(有)